

拾

三年
筆順
画数
9
オ シュウ・ジユウ
オン シュウ
ウン ヒロヒラ

成り立ち



手の形をあらわした「手」と、「合う」といういみの「合」とを組み合わせて作った字です。

「手が、ゆかやじめんの上にあるものと「合う」といういみの字で、「ひろう」」のには、そのものが「手と合う」ことがどうしてもひつようですね。ジユウの音は、数字の「十」の音と同じですから、おもおもしろく書くばあいには、「金拾万円」というように「十」のかわりにつかうことがあります。

「合」は「△」と「口」との会意・形声字で、「口」の音が取られている。「拾」では「△」の音が取られている。△は「集」であるから、「手で集める」意味かも知れない。」

便い方

△このじょうたいを拾収するのは、ごみを拾収するよなわけにはいきません。とてもわたしの手にはおえません。

△おとしものを拾得したときは、すぐにけいさつにとどけましよう。収得するところになります。

△拾得 (得 4年594) は「ものを手に入れる」といういみの字ですが、ここでは「拾」のいみをたすけているだけで、本来のいみはありません。したがって、たんに「拾う」といういみのことばです。

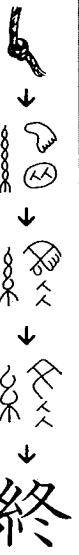
△拾つたものを自分のものにすること」は「取得」といつて、「拾得」とくべつしています。

熱語例

終

三年	筆順	画数
△	△	11
オン	紺 紋 終	
ウン	シユウ	
お わる える		

成り立ち



一年の「おわり」のさせつをあらわした「冬(2年202)」

と、糸とを組み合わせて作った字で、「糸の「おわり」」といういみの字です。

ぬいものをしたとき、「おわり」のところを玉むすびにしてとめますが、その「むすび玉」を「終」という字であらわしました。

今では、糸にかんけいなく「ものごとの「おわり」」をあらわすのにつかいます。

使い方

△クリスマスがやつて来ると、そろそろ一年も終わりです。すぐにお正月が来て、また、新しい一年が始まります。

熱語例

△学校から帰ると、宿題を終えてから遊びに行きます。

△終始 (始めから終わりまで、ずっと。「終始、試合を行つた」などといふうに、つかいます。)

△終業 (じごとや授業などを終えること。「終業式があり、通信簿をもらつた」などといふうに、つかいます。)

△終点 (終わりの所。とくに、電車やバスなどの終わりの所を言います。「市役所行きのバスに乗つて、終点まで行つた」などといふうに、つかいます。)

△終了 (終わること。「準備はすべて終了した」などといふうに、つかいます。)

△有終 (終わりが有ること。終わりをきちんとすること。「有終の美をかざる」といえば、「終わりまできちんとやり通して、りっぱな成果をあげること」です。)